



## 書名：芸術による教育

著者：ハーバート・リード

訳者：宮脇理，岩崎清，直江俊雄

出版社：フィルムアート社

出版年月：2001年10月25日

総ページ数：421ページ

ISBN：9784845901241



推薦者

山木朝彦

鳴門教育大学大学院教授

『芸術による教育』というこの本の書名は、美術教育に携わる者にとっては、いわば同志的な意識を掻き立てるある種の呪文のような言葉になっている。呪文というのは、すこし言い過ぎかもしれないが、普通教育のなかで美術という文化的な営為についての学習機会を保障するための理念として、この書名は、美術教育者の間で、そのまま合い言葉のように使われている。

『芸術による教育』の「による」という言葉は、through という前置詞が使われている。つまり、Education through Art というのが、原典の書名である。Art を通じて行われる教育を含意していると美術教育の重要性を推進している人々は、この through に意味を充填する。

たしかに、この本の著者であるハーバート・リード (Herbert Read) は、Art がすべての精神的な活動を産み育てる豊饒な人間活動であるとみなしている。だからこそ、この地上に生きる人間の誰もが Art を学び、Art を享受し、Art から学び、Art を発展させる必要があると、彼は確信を持って声高に主張している。

ところで、日本の社会には、教育に関わる嫌な言葉がある。主要教科と周辺教科という言葉だ。いったい誰がこのような教科の序列化を望んでいるのだろうか？

多元文化社会と呼ばれることもある現代社会のなかで、地球上のどの地域に住む人々にたいしても、きちんとした敬意を払い、それぞれの固有な文化的土壌を尊重し、密度の高いコミュニケーションを行うためには、美術や音楽などの芸術関連の科目が「主要なものではない」という錯覚から、一刻も早く、わたしたちは目を覚まさなければならない。

この覚醒を促すためには、「芸術による教育」というモットーを語るだけでは駄目である。「芸術による教育」という発想の裏付けとなる理論的な根拠をつぶさに検討しなければならない。その大事な手掛かりを見つけ、その一步を踏み出す近道として、私は教育を志す全てのひとに、この古典を読むことを推奨したいと思う。

これから、この本を手に取り、読まれる方々のために、若干の本編紹介をしておきたいと思う。それは、この本には、執筆当時、リードが心酔していたユング心理学の影響が濃厚に反映しているということだ。特に、第6章の「無意識的な統合の方式」という章に、それは顕著に表れている。臨床的な知のあり方として、ユング心理学の理論や実践的な有効性を論じた著作は多いが、どのようなかたちで、芸術教育論と関係づけられているのか、本書のこのパートに知的好奇心を掻きたてられるひとも多いであろう。さらに、この章では、フロイトの理論との比較検討やゲシュタルト心理学への言及もあり、造形的な「創作」の世界を取り巻く、こうした心理学的なアプローチの布置を総覧するうえで、有益である。

また、第5章「子どもの芸術」も造形表現の発達の道筋を考える上で、現代においてもきわめて示唆的である。たとえば、描かれた図像についてだけではなく、描くというプロセスに分析や解釈というメスを入れたことは、彼の功績である。また、「イメージ」と「記号」という観点から、子どもの表現を整理しようとするアプローチには、美術批評など他のジャンルの著作にも共通する彼の思考のパラダイムが姿を現しており、興味深い。

最後に、この『芸術による教育』の翻訳プロジェクトを企画し、岩崎清氏、直江俊雄氏とともに訳した訳者代表の宮脇理 (おさむ) 氏の言葉を引用し、関連する思い出を綴ることで、この本の紹介を終えようと思う。

「筆者 (宮脇) については、横浜国立大学教育学部に修士課程が新設された1979年 (昭和54) から、さらに、筑波大学芸術学系博士課程に配置換えとなった1984年 (昭和59) を経て、定年退官した1993年 (平成5) までの、およそ15年間、原著ならびに訳書を演習の対象本として使用し、演習に臨んできた時間が回想される。」(宮脇理「本書への接近 - 解題にかえて」357頁)

実際に、この演習形式の授業を受講した者の一人として、リードの『芸術による教育』の原著と和訳書 (植村鷹千代・水沢孝策共訳版) についての「読み取り」を巡るディスカッションを軸に展開した宮脇教授 (当時) の授業は刺激的だった。

本書の思弁的な論理が、実際の芸術や教育の場で、どのような具体的な考え方に関連しているのか、宮脇理教授は、まさに手取り足取り教えてくれた。同時に、生意気な大学院生であった私の突飛な考えさえも、その適切な着地点がどのあたりにあるのか、本書を介してサジェスションを与えてくれた。

それゆえ、本書を読むことは、私にとって二重の意味を持つ。歴史的な著作の理論的枠組みを振り返る意義と、あの刺激的な授業を思い出し反芻する楽しみと。

